

聖福寺所蔵の銅鏡と銅剣

1. はじめに

3世紀半ばに編纂された『魏志』倭人伝には「(伊都国には) 世々王有り」と記され、王の墓と思われるものが、現在まで三雲南小路遺跡・井原鍮溝遺跡・平原遺跡の3箇所を確認されている。いずれも銅鏡を中心とする多量の副葬品が伴い、一定の墓域を持つことに特徴がある。

しかし、三雲南小路遺跡と井原鍮溝遺跡は江戸時代の不時発見に伴い、副葬品の大半が持ち出され散逸している。なお、発見当時の情報は福岡藩土青柳種信が記した『柳園古器略考』に詳しい。

三雲南小路遺跡は江戸時代の発見の後(1号甕棺)、1975年の福岡県教育委員会の発掘調査で所在場所ならびに2号甕棺が確認されたが、井原鍮溝遺跡は現在も所在不明である。

2. 三雲南小路遺跡の概要と副葬品

三雲南小路遺跡では2基の甕棺が確認された。1号甕棺は江戸時代にほぼ完全に壊されてしまうが、青柳種信によると高さは1.0mほどの合口甕棺といわれる。副葬品は棺内から前漢鏡35(重圏彩画鏡1、

四乳雷文鏡1、重圏「清白」鏡3、連弧文銘帯鏡26以上)、ガラス璧8、ガラス勾玉3、ガラス管玉60以上、細形銅矛1、中細銅矛1が、棺外からは有柄中細銅剣1、中細銅戈1、朱入小壺1が出土している。また、金銅四葉座飾金具も8点出土している。

そして、2号甕棺には前漢鏡22以上(星雲文鏡1、連弧文銘帯鏡21以上)、ガラス璧片転用垂飾1、硬玉勾玉1、ガラス勾玉12が納められていた。

なお、周溝からは土器とともに辰砂をすりつぶす石杵と水銀朱を入れた鉢も出土している。

3. 聖福寺所蔵の銅鏡と銅剣の位置づけ

①銅鏡

銅鏡は直径16.4cmを測り、「潔清白而事君」から始まる銘文を持つことから、連弧文「清白」鏡と呼ばれる。この銅鏡は『柳園古器略考』にも図示されており、有柄中細銅剣とともに国の重要文化財に指定されている。また、発掘調査では失われていた破片が出土した。同型鏡に泉屋博古館所蔵銅鏡が一面存在する。



第1図 三雲南小路1号甕棺出土連弧文鏡



第2図 三雲南小路1号甕棺外出土有柄中細銅剣

②有柄中細銅剣

有柄中細銅剣は青柳種信によると1号甕棺外に切先を上に向けていたことが分かる。現在長51.5 cmを測るが、切先先端を一部失っているため、全長は53 cm前後に復元される。

銅剣は身・柄・柄飾が同時に作られたいわゆる一鑄式銅剣である。一鑄式銅剣は国内では本例の外に吉野ヶ里遺跡（佐賀県）、向津具遺跡（山口県）、柏崎貝塚（佐賀県）の4例のみ確認されている。以前は朝鮮半島に見られず、国内製とされていたが、近年、出土例が報告され、後者3例については朝鮮半島製の可能性も出てきた。

しかし、本例は朝鮮半島に見られず、関から切先まで37 cm前後を測ることから、中細の段階に該当し、国内産と見られる。

また、最近の研究では、弥生時代後期の対馬の人々は朝鮮半島との交流の際に、銅剣を帯びて渡海した可能性も指摘されており、この銅剣はまさしく対外交渉をリードした伊都国の王にふさわしい副葬品といえる。

このように破片を中心とする三雲南小路遺跡1号甕棺の出土品の中で、聖福寺所蔵の銅鏡と有柄中細銅剣は全体像をつかむことができる数少ない重要な資料であることがわかる。また、江戸時代に出土した後、今日まで研究が継続されるなど、多くの情報を内に秘めた遺物といえる。

【参考文献】

- ・小田富士雄（1997）「一鑄式銅剣」覚書『研究紀要』1 下関市立考古博物館
- ・柳田康雄編（1985）『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
- ・吉田広（2001）「青銅器・青銅にみる弥生時代の交易」『弥生時代の交易』

伊都国歴史博物館

ITOKOKU HISTORY MUSEUM

〒819-1582 福岡県前原市大字井原916
916 IWARA, MAEBARU CITY, FUKUOKA, JAPAN
PHONE : (092) 322-7083
FAX : (092) 321-9155